

## 「異郷」におけるカール・ツックマイヤーの祖国愛

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2019-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/20361">http://hdl.handle.net/10291/20361</a>

## 「異郷」におけるカール・ツックマイヤーの祖国愛

### Carl Zuckmayers Vaterlandsliebe im „Elend“

博士後期課程 独文学専攻 2017年度入学

松 澤 智 子

MATSUZAWA Tomoko

#### 【論文要旨】

戯曲『悪魔の将軍』にアメリカ人のバディ・ローレンスが登場する。本稿は、ツックマイヤーの分身と言われているローレンスを通じて、異郷で暮らし続けた作家の祖国への思いを解明することを目指す。

作品における「愛情」, 「憎悪」, そして「狂気」は、祖国への「愛情」, ヒトラーへの「憎悪」, ヒトラーを妄信している国民の姿のありさまを「狂気」と現したのであろう。ナチスの下で間違った方向に進んでいるドイツをアメリカに救済して欲しい, というツックマイヤーの切望からドイツとアメリカの架け橋となる人物としてローレンスが誕生したと推測する。

1946年, アメリカ国務省からの依頼遂行のためドイツに向かったツックマイヤーは, かつて住んでいた街の変わり果てた姿を目の当たりにして強い故郷喪失感に襲われる。その一方, アメリカ国籍を取得するなど, アメリカが本当の故郷であるかのようにも感じていた。歴史に翻弄されながら波乱に満ちた生涯を送ったことで, 故郷は自分で選ぶ, という考えにたどり着いたツックマイヤー。新たな故郷アメリカを得ると同時に, 何処にいても祖国ドイツのことを忘れることがなかったツックマイヤーの愛する「祖国」は, 最後まで「ドイツ」であった。

【キーワード】『悪魔の将軍』, 『別離と帰還の悲歌』, 亡命作家, 異郷 (Elend), 狂気 (Wahnsinn)

#### 序章

カール・ツックマイヤーがアメリカ亡命期に執筆した全三幕の戯曲『悪魔の将軍 (Des Teufels General)』(1946) の第二幕に, アメリカ人記者のバディ・ローレンス (Buddy Lawrence) が登場する。ポッペやゼードルフらは, 「ローレンスはアメリカに感謝し, ドイツと世界各国が和解す

ることを願うツックマイヤーの分身である<sup>1)</sup>という見解を示している。しかし、亡命時期のツックマイヤーの行動とローレンスという人物の特徴を照らし合わせているだけで、ローレンスの言葉に込められたツックマイヤーの心境については論じていない。

ツックマイヤーは散文『別離と帰還の悲歌 (*Elegie von Abschied und Wiederkehr*)』(1949) の中で、「異郷 (Elend) とは、自国から追放された者たちや酷い目にあった者たち、故郷を失った者たちの言葉である<sup>2)</sup>」と述べている。反ナチスを表明したことによりドイツを追われ、亡命を余儀なくされたツックマイヤーにとって、「異郷」は自分の状況を表現するのに適した言葉であった。一方、ツックマイヤーは自分を受け入れてくれたアメリカ政府と隣人のアメリカ人たちに感謝し、「異郷」であったアメリカを「故郷」と感じるようになっていく。

本稿では、1939年に完成した叙情詩『別離と帰還の悲歌』と、1949年に記した散文『別離と帰還の悲歌』を手がかりにして、はじめにツックマイヤーにとってアメリカが離れ難い故郷の様な存在になったことを確認し、次に『悪魔の将軍』の登場人物であるローレンスを通じて、異郷で暮らすツックマイヤーにとって祖国がどのような存在であったのかを解明することを目指す。

## 第1章 叙情詩『別離と帰還の悲歌』と散文『別離と帰還の悲歌』

ツックマイヤーは、叙情詩『別離と帰還の悲歌』にドイツから離れる辛さを、そして散文『別離と帰還の悲歌』には、亡命生活を送ることでアメリカから離れ難くなった心情を書き残した。この二つの感情があったからこそ、『悪魔の将軍』にローレンスが誕生したと言えるのではないだろうか。まず、この詩と散文を手掛かりにして、ツックマイヤーの「ドイツとの別離」と「アメリカとの別離」を確認する。

### 1. 叙情詩『別離と帰還の悲歌』

1939年6月にニューヨークに到着してから数週間後、ツックマイヤーは仕事を得るためにハリウッドに向かった。代理人を介して交渉すると、ドイツで成功した作家ということが考慮されて好条件で契約を結ぶことができた<sup>3)</sup>。自分が企画して最後まで指揮できる仕事をツックマイヤーは望んだが、契約上それは許されず、アメリカ人が好むストーリー展開や盛り上げ方を厳守しなければならなかった。自分の希望が叶わない状況は幸福なことではないと思うツックマイヤーは、ハリウ

---

<sup>1)</sup> Reiner Poppe, *Carl Zuckmayer/Des Teufels General*, Königs Erläuterungen und Materialien Bd. 283. Hollfeld: C. Bange, 1988, S. 42.

Karl Seedorf, *Textanalyse und Interpretation zu Carl Zuckmayer Des Teufels General*, Königs Erläuterungen Bd. 283. Hollfeld: C. Bange, 2016, S. 52.

<sup>2)</sup> Carl Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir. Horen der Freundschaft*, Frankfurt am Main; S. Fischer, 1996, S. 628-629.

„Elend”を「異郷」と訳した点については本稿5-6頁目を参照のこと。

<sup>3)</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 565-566.

ッドでの生活に疑問を抱き始める<sup>4</sup>。

このような心境で創作した叙情詩『別離と帰還の悲歌』は、後に出版された詩集『詩 (*Gedichte*)』(1948)に収められるのであるが、詩作した1939年秋当時、ツックマイヤーはこの詩を公に発表できるとは考えておらず、妻と数名の友人の前で朗読しただけであった<sup>5</sup>。

*Elegie von Abschied und Wiederkehr*<sup>6</sup>

Ich weiß, ich werde alles wiedersehn,  
Und es wird alles ganz verwandelt sein.  
Ich werde durch erloschne Städte gehn,  
Darin kein Stein mehr auf dem andern Stein —  
Und selbst wo noch die alten Steine stehen,  
Sind es nicht mehr die altvertrauten Gassen —  
Ich weiß, ich werde alles wiedersehen  
Und nichts mehr finden, was ich einst verlassen.

Der breite Strom wird noch zum Abend gleiten.  
Auch wird der Wind noch durch die Weiden gehn,  
Die unberührt in sinkenden Gezeiten  
Die stumme Totenwacht am Ufer stehn.  
Ein Schatten wird an unsrer Seite schreiten  
Und tiefste Nacht um unsre Schläfen wehn —  
Dann mag erschauernd in den Morgen reiten,  
Wer lebend schon sein eignes Grab gesehn.

Ich weiß, ich werde zögernd wiederkehren,  
Wenn kein Verlangen mehr die Schritte treibt.  
Entseelt ist unsres Herzens Heimbegehren,  
Und was wir brennend suchten, liegt entleibt.  
Leid wird zu Flammen, die sich selbst verzehren,

---

<sup>4</sup> Ebd., S. 566–568.

<sup>5</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 628–629.

<sup>6</sup> Carl Zuckmayer, *Elegie von Abschied und Wiederkehr*, in: Carl Zuckmayer, *Gedichte 1916–1948*, Berlin und Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag vorm. S. Fischer, 1948, S. 137.

Und nur ein kühler Flug von Asche bleibt —  
Bis die Erinnerung über dunklen Meeren  
Ihr ewig Zeichen in den Himmel schreibt.

「別離と帰還の悲歌」

わかっているのだ、すべてを再び目にするだろうと、  
そして、すべてが変わってしまっているだろうと。  
消え去った街々を歩き回るだろう、  
そこにはもはや他の石の上に石はない—  
そして、まだ昔の石がある場所でさえ、  
もはや慣れ親しんだ路地ではない—  
わかっているのだ、すべてを再び目にするだろうと  
そして、かつて離れたものは何も見つからないことを。

大河はまだ夜に向かって流れているだろう。  
風もまだ柳の間を吹いているだろう、  
その柳は自然のまま干潮時に  
岸辺の静かなお通夜に立っている。  
一つの影が我々のかたわらで歩き、  
一番深い夜を我々のこめかみの周りに吹きつける—  
その時、震えながら朝に向かって馬を走らせたらしい、  
生きながらにしてもう自分の墓を見てしまった者は。

わかっているのだ、戸惑いながら帰郷するだろうと、  
もはや欲望が歩みを駆り立てないならば。  
我々の心の望郷の念は魂がなくなり、  
我々が燃えるように探していたものは、体を失い横たわっている。  
苦しみは己を燃え尽す炎と化し、  
そして、冷めた灰の飛行だけが残る—  
暗い海々の上の記憶が  
永遠のしるしを空に書くまで。

政治的あるいは社会的な環境はこの詩の中では問題にされておらず、遠く離れた異国でツックマイ

ヤーは、今から起こりうるドイツの運命を悲観的な基調で表現している。全体的に暗さで覆われている詩であるが、ドイツに帰還した際に変わり果てた街を目の当たりにし、記憶とは全く異なる風景に絶望しながらも、しかしドイツの再生を強く願う詩である。さらに、ベルリンが爆撃される前に書かれたにもかかわらずドイツの敗北を予期していたかのような内容は、懐かしい良き日々の思い出を綴る以上に、痛烈な祖国への想いが込められている。亡命から数週間のうちに今後を見通したツックマイヤーが、悲劇的なドイツの結末を作品として残したこと、自叙伝『私の一部であるかのように (*Als wär's ein Stück von mir*)』(1966)に掲載したことは決して偶然ではなく、この詩が生涯を通じて重要な作品の一つであることをツックマイヤー自身が考えていたにちがいないだろう。

## 2. 散文『別離と帰還の悲歌』

マールバッハにあるドイツ文学文書保管所 (Deutsches Literaturarchiv Marbach, DLA) が所蔵している散文『別離と帰還の悲歌』は、A4 サイズ4枚にタイプライターで作成された原稿に手書きで修正を加えた資料である<sup>7</sup>。1枚目の上部に手書きで「„Elegie von Abschied und Wiederkehr” 1949」とタイトル表記されていることから執筆年が特定できるのであるが、この資料の大部分は1966年に出版した自叙伝に掲載されている。ツックマイヤーが1949年当時、『別離と帰還の悲歌』というタイトルで自叙伝を出版する考えであったのか、自叙伝を本格的に書き始めた時に叙情詩に関するメモ書きとしたものが残っていたのかはわからない。この資料執筆に関する論述は別に機会を譲るが、本稿ではツックマイヤーのアメリカから離れる心境を明らかにする手掛かりとして、この散文を取り上げる。

散文『別離と帰還の悲歌』は、次のように始まる。

この詩は、亡命の —異郷における生活の— 環境と精神状況を映している。本来、異郷 (Elend) は、外国という意味に他ならない。異郷の根源には、自国から追放された者たちや酷い目にあった者たち、そして故郷を失った者たちの言葉である (中略筆者)。

この帰還の際に、新たな別離があった。この別離がどれほど厳しく辛いものになるのか、私は予測していなかった。アメリカの、詳しく言うと、緑の山岳地バーモント州の片田舎からの別離。この地で数年間、不慣れな仕事であったが農場経営者として徐々に上達し、なんとか生活を続けてきたのだ。

この文に続き、1946年11月からアメリカ国務省の依頼を受けて現地調査のためにドイツに帰国したこと、そしてバーモント州バーナードで過ごした日々が綴られていく。ツックマイヤーが „Ausland” ではなく „Elend” と綴っていることに注目したい。„elend” の元来の意味は、「外国で

---

<sup>7</sup> Carl Zuckmayer, *Elegie von Abschied und Wiederkehr*, Prosa (DLA, Nachlaß Carl Zuckmayer)

暮らすこと、異郷（他国）で暮らすこと」である。また、„elend”（みじめな）は、古高ドイツ語では「追放された（elilenti）」、中高ドイツ語では「不幸な（ellende）」という意味で、原義は「別の国に」であった。古代ゲルマン時代では、祖国を追われて他国を彷徨することはみじめな運命を意味していた<sup>8</sup>。現在 „Elend” には「不幸、みじめな状態、貧困、異郷」といった邦訳があるが、『悪魔の将軍』に登場する人物と作家自身の状況に焦点を当て、本稿では「異郷」を充てることを確認しておきたい。

亡命当初ドイツに帰国することを願っていたツックマイヤーは、バーモント州に移り住み農場を営むことで徐々に心境に変化が現れ、アメリカから離れ難くなっていく。そして、帰国したい気持ちと農場を続けたい気持ちが入り混じる中で執筆された『悪魔の将軍』に、「アメリカで暮らし、アメリカを愛するドイツ人ツックマイヤー」の分身として、「ドイツで活動し、ドイツを愛するアメリカ人ローレンス」が描かれたとしても不思議ではない。

1946年12月に『悪魔の将軍』の初演をチューリッヒで迎え、それが大反響を呼んだことを機に、ツックマイヤーはドイツ文壇で再び活躍するのであった。そしてスイス山岳地域のザース・フェーで暮らし始める1958年7月まで、ツックマイヤーはドイツとアメリカを行き来する生活を続ける。第二次大戦が終わっても直ぐにアメリカから離れなかったのは、農作業を教えてくれた仲間たちへの感謝や、自然に囲まれた生活環境で心が穏やかになったことが理由であるとの散文から知ることができる。

## 第2章 ツックマイヤーの分身バディ・ローレンス

### 1. ドイツを愛するアメリカ人のバディ・ローレンス

『悪魔の将軍』の主人公ハラスの友人であるローレンスが登場する第二幕は、ハラスの自宅で展開する。ハラスを敬愛する副官リュットヨーハンとハラスの運転手コリアンケが、SSに連行されたきり二週間戻って来ないハラスを心配しながら待っている場面から始まる。ハラスが東部戦線の視察に行っているという軍の公式発表と、「ハラスが死亡した」という海外新聞を話題にしているところに、この記事を書いたローレンスが訪ねてくる。ローレンスはハラスの居場所を知るために、あえてドイツ軍幹部を煽る記事を書いたのであった。

ローレンスはベルリン駐在のアメリカの新聞記者で、この記事を掲載したことによりドイツ国内での活動が禁止にされると同時に、ゲシュタポに監視される身となった。アメリカに帰国する前にハラスに会おうと追跡をかわしながらハラスの自宅まで来たのである。だが、追跡をかわすことはできず、到着するやいなやヒムラーを模した登場人物である文化指導官シュミット＝ラウジッツがやって来る。そして、「きわめて慎重な配慮がされています。事故が起こりかねませんよ、例えば

---

<sup>8</sup> *Deutsches Wörterbuch*, von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, herausgegeben von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin in Zusammenarbeit mit der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen, Bd. 3., München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984, S. 406-407.

交通事故など。その場合、調査の手間も人物確認の手間もはぶけます<sup>9</sup>」と警告する。シュミット＝ラウジッツの登場とその言葉から、ナチスは抵抗する者を事故と見せかけて始末することを、ツックマイヤーは暗に伝えていることがわかる。また、「ドイツ国内で活動を禁止にされる」のは、ツックマイヤー本人がナチスにされたことである。

ローレンスとシュミット＝ラウジッツが話しているところに、ハラスが帰って来る。その後、続々と他の登場人物がハラスを訪ねて来るが、その中の一人、幼少時からドイツ女子青年同盟 (Bund Deutscher Mädel, BDM) に所属しているピュツヒェンが、進歩的帝国婦人団体指導者継続候補者のための特別講習 (Sonderschulung für vorgeschrittene Reichsfrauenschaftsführerinnen-anwärterinnen)<sup>10</sup> に参加したことを知ったローレンスは、その講習について詳しく知りたいとインタビューを申し出る。講習の主要分野について問われたピュツヒェンは、次のように答える。

世界観よ、もちろん。特に婦人の利益の観点からの。民族政策、淘汰、性衛生学、身体文化、精神文化などあらゆることについて一流の権威者の講義を聞きます。目下のところ、「国民の生活における苦痛」という連続講義を受けております。大変面白いものですわ。<sup>11</sup>

続く「それが婦人的利益であるということですか」というローレンスの問いにピュツヒェンは返答する。

利益どころではないわね。感覚生活の鍛錬、それは母親となった時から始めなければなりません。すべて学問的基礎に基づいています、おわかりかしら。生物学的に、医学的に、哲学的に。ニーチェにおける苦痛。苦痛の倫理的意義。(中略筆者)。ですから妊娠した時、その時に麻酔はいたしません。縫合線がメリメリと裂けることをはっきり意識して痛みをこらえ、叫び声をあげねばならないからです。<sup>12</sup>

ピュツヒェンの返答には、ツックマイヤーが抱いているナチスに対する憎悪と無意味な教育をしているナチスへの揶揄が表われているのではなかろうか。確かに出産は女性にしかできないことであるが、それを「利益」にすり替えて民族政策などに結び付けていることへの反感、そしてニーチェの思想、特に神に代わる理想の人間、いわゆる「超人」を利用されたことへの憤慨を感じ取ることができる。ツックマイヤーは15歳の時に『喜ばしき知恵』を読み、『ツァラトストラかく語りき』

---

<sup>9</sup> Carl Zuckmayer, *Des Teufels General*, Stockholm: Bermann-Fischer Verlag, Wien: Schönbrunn Verlag, 1947, S. 88.

<sup>10</sup> Ebd., S. 117.

<sup>11</sup> Ebd., S. 118.

<sup>12</sup> Ebd..

や『悲劇の誕生』などのニーチェ作品の虜となり、教科書では得られない知識をニーチェから学び、彼の詩に魅了されていたのであった。そして第二次世界大戦中ツックマイヤーは、「我を殺さぬもの、我を強からしむ」という言葉を幾度も思い起こしていた<sup>13</sup>。ツックマイヤーにとってニーチェの存在は大きく、そのニーチェをナチスが利用していることにツックマイヤーは冷静ではいらなかったであろう。

インタビューが続く中で、女性たちが下着だけを身につけて体操する話を聞いたハラスは、それを嗜める<sup>14</sup>。

ハラス　　：行儀が悪いな。

ピュッツヒェン：それが偏見なのよ。行儀が悪いなんて。階級意識とか社会的差別なんてものは、私たちの所ではすべて無くなっているわ。ドイツの婦人はみんな貴族出身です。

ローレンス　：貴族民主主義ですね。

ピュッツヒェン：ばかげたことを。民族共同体よ。

この後、民族共同体という考えが欺瞞であるとハラスに指摘されたピュッツヒェンは腹を立て、その場から離れるのであった。

ツックマイヤーはローレンスを記者として登場させることによって、「ドイツ人なら知っている当然であることを、アメリカ人は知らないから教えてあげる」というピュッツヒェンの態度を成立させる状況を作り出し、BDMに所属する者の考え方を引き出すことに成功するのであった。そしてそれはジークフリート・メヴスが既に指摘している様に、「観客はインタビューを介して、ナチスの女性に対する教育の目的やその方法を認識できる<sup>15</sup>」のである。ツックマイヤーが『悪魔の將軍』を執筆していた当時、アメリカで大ヒットとなった反ナチズムの舞台作品『トゥモロー・ザ・ワールド』(1943)<sup>16</sup>が上演されていた。ツックマイヤーは、ナチスに対する反感をより強く抱かせる目的で『悪魔の將軍』をアメリカ人に向けて上演することを考えていたと推測できる<sup>17</sup>。アメリカ人の観客が、アメリカ人であるローレンスに共感する効果を狙い、アメリカ人が知らない、ド

<sup>13</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 182. u. S. 252.

ニーチェは『偶像の黄昏』に „Was mich nicht umbringt, macht mich stärker (我を殺さぬもの、我を一層強からしむ)” と記しているが、ツックマイヤーは自叙伝に „Was mich nicht umbringt, macht mich stark” と記している。

<sup>14</sup> Zuckmayer, *Des Teufels General*, a. a. O., S. 118.

<sup>15</sup> Zit. Siegfried Mews, *Zuckmayer/Des Teufels General*, Frankfurt am Main: Moritz Diesterweg, 1973, S. 36.

<sup>16</sup> ジェームス・ガウ (James Gow, 1907-1952) の作品。1943年4月から1944年6月の間に500回上演されている。URL: <https://www.ibdb.com/> (参照日2019年4月18日)

<sup>17</sup> 松澤智子『『悪魔の將軍』総合的考察のための予備的作業—上演実現をめぐるカール・ツックマイヤーの活動—』明治大学大学院『文学研究論集』(50), 2018, 61-75頁参照。

イツで行われているナチスの実態を伝えようとするツックマイヤーの意図があったのではなかろうか。「変わり果ててしまった故郷ドイツを一から立て直すためにドイツの敗北が必要である<sup>18</sup>」と考えたツックマイヤーは、亡命者である自分を受け入れてくれたアメリカに感謝し、アメリカを信頼し、加えて、ドイツが立ち直るきっかけを作ることもアメリカに託していたのではなかろうか。

## 2. 「愛情」と「狂気」

戦利品や旅行記念品、飛行士たちと撮った写真が詰め込まれている部屋が、ハラスの自宅にある。プロペラや撃ち壊された飛行機の部品も飾られ、「プロペラバー」と呼ばれているこの部屋で、ローレンス、ハラス、そしてハラスと結婚の約束をしたオペラ歌手ディド・ガイスの三人は、夕暮れに染まる街を見ている。飛行中の戦闘機から眺める街ではなく、まるで戦闘機の落下を予期するかのようにハラスが「海の底のようだ」と言いい、会話が展開していく。暮れてゆく都会の風景を見ながらハラスは、住居が海底に沈み、魚が自分たちの目玉を飲み込む想像を始める。盲目になった自分たちは、指先で見て、舌先で聞き、脊髄で嗅ぎ、脳で息をする。それは原始的な感覚であり、「ほとんど狂気に近い<sup>19</sup>」と言う。「狂気」と聞いたディドは、自分が狂人を演じることをいつも望んでいることを明かすのであった<sup>20</sup>。

ディド：こんな時があるの、一人で通りを歩いていると、自分があのリュシールになっていることが—私（リュシール）のカミューをあの人たちが殺した—その革命の死刑執行人たちは夜通し歩いている—そして、私は突然暗闇から抜け出てこう叫ばすにはいられない。「王様万歳！」って。こんな風に死にたいわ。これって気が触れているのかしら。

ディドに続き、「狂気」という言葉に反応したローレンスは、ドイツに対する想いを語り始める<sup>21</sup>。

ローレンス：ドイツ人の言葉が羨ましいな。狂気。詩人の言葉だ。ほとんど神聖な言葉と叫んでもいい。情熱も。畏敬も。憧憬。熱狂。

ハラス：我々の言葉をよく知っている。

ローレンス：（悲しげに）ドイツが好きなんだ。

ハラス：まだ好かれる価値があると思うのかね。これでも。

---

<sup>18</sup> Volker Wehdeking, *Mythologisches Ungewitter. Carl Zuckmayers problematisches Exildrama "Des Teufels General"*, in: (Hrsg.) Manfred Durzak, *Die deutsche Exilliteratur 1933-1945*, Stuttgart: Philipp Reclam, 1973, S. 514.

<sup>19</sup> Zuckmayer, *Des Teufels General*, a. a. O., S. 129.

<sup>20</sup> Ebd., S. 129.

<sup>21</sup> Ebd., S. 129-130.

ハラスは、あまりにたくさんの実体の無いものを自分たちに産み付けてきたドイツ人の狂気に飽き飽きしており、「憧れるものさ、狂気や妄想のない単純な民族に。フットボール選手、機械組み立て工、チューイングガム愛好家、子どもじみた人<sup>22</sup>」、つまりアメリカ人への憧れを告げる。そしてまた、ドイツの狂気を嘆き続ける<sup>23</sup>。

ハラス　：うんざりなんだ、重要性、意味、死の陶酔、分裂した内的生活、ファウスト的現金書留配達夫、魔につかれたような地域の見張り番というものに。生半可な教養が、我々の下半身を形而上学で、そして頭を大腸ガスでいっぱいにしやがった。ひどく不快なものが我々を引きずりおろす（中略筆者）。哀れな民族さ。

ローレンス：ドイツ人は好きだよ。

ハラス　：俺だって。憎悪するほど（後略筆者）。

なぜツックマイヤーは、『ダントンの死』（1835）の最後の場面で「王様万歳！」と叫ぶリュシールを演じたいとディドに言わせたのだろうか。そこには、「愛情から生まれた狂気」が関係していると考えられる。夫を処刑されたリュシールは、愛情の深さ故に悲しみや怒りを通り越して自己抑制能力を失い、「王様万歳！」と叫ぶ狂気めいた行動をしてしまう。ビューヒナーは、シェイクスピアの『ハムレット』（1600?）の冒頭で従臣の二人が交わす合言葉「王様万歳！」を借用している<sup>24</sup>。『ハムレット』では、狂気を装うハムレットとその恋人オフィーリアがハムレットを愛するが故に狂死する。これら『ダントンの死』と『ハムレット』の両作品は、「愛情」、「狂気」そして「死」という視点で結びついている作品である。その点を踏まえると、ディドは狂おしい程にハラスを愛し、その愛を貫くために死も覚悟していることを、リュシールに憧れを抱いているディドの台詞から読み取ることができる。それと同時に作者ツックマイヤーは、ハラスとディドの別離をほめかしてもいるのである。

ハラスの「我々の言葉をよく知っている」という台詞には、ローレンスとハラスが共感し合っていることを確認させる効果がある。つまり、ドイツ人であるハラスとアメリカ人であるローレンスは、互いに言葉と文化を異にしているが、互いに歩み寄り理解し合うことで関係が深まっていることが確認できる。これを言い換えると、ドイツとアメリカが互いに理解し合い、両国が和解し、良好な関係を築いていくというツックマイヤーの切望が込められた台詞と言えるのではなかろうか。また、ローレンスの「ドイツが好きなんだ（Ich liebe Deutschland.）」、「ドイツ人は好きだよ（Ich

<sup>22</sup> Zuckmayer, *Des Teufels General*, a. a. O., S. 130.

<sup>23</sup> Ebd..

<sup>24</sup> Georg Büchner, *Danton's Tod*, bearbeitet von Burghard Dedner/Thomas Michael Mayer/Eva-Maria Vering, historisch-kritische Ausgabe mit Quelledokumentation und Kommentar (Marburger Ausgabe), Bd. 3.4, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2000, S. 237.

liebe die Deutschen.)」と、ハラスの「憎悪するほど (Bis zum Haß)」という共感し合っている二人の台詞は、アメリカで亡命生活を送っているツックマイヤー自身の言葉である。「愛情」と「憎悪」の相反する感情は、「狂気」だけではなく「情熱」、「畏敬」、「憧憬」、「熱狂」というそれぞれの言葉の裏側に望郷の念からくるドイツへの愛情と、ナチスに翻弄されているドイツへの憎悪、そしてドイツ国民への悲痛な思いを表しているであろう。「狂気」に対するローレンスの反応は、すなわち、ナチス政権下のドイツとヒトラー、そしてドイツ国民に対するツックマイヤーの反応であると考えられないだろうか。「根拠のない希望 (Wahn)」を持って国民を負の方向へ導くヒトラーと、とりつかれたかのようにヒトラーを妄信している国民の姿を「狂気の沙汰 (Wahnwitz)」だと、ツックマイヤーはアメリカから見ていたにちがいない。さらに、ローレンスが「狂気」を「詩人の言葉」と言った背景に、ツックマイヤーは幼少期から関心を寄せてきたゲーテを思い浮かべていたのではなかろうか<sup>25</sup>。例えば以下のゲーテの箴言は、ドイツとの別離を余儀なくされたツックマイヤー自身にも狂気が襲ってくるかもしれないという不安を払拭するために、自らに向けた箴言になっていたかもしれない。

In jeder großen Trennung liegt ein Keim von Wahnsinn; man muß sich hüten,  
ihn nachdenklich auszubrüten und zu pflegen.<sup>26</sup>

全ての酷烈な別離には、狂気の芽がある。くよくよ考え込んでこれを芽生えさせて育てないよう、注意しなくてはならない。

第二幕の終盤、空挺隊長のアイラースが新型機試行中の落下事故で死亡したという一報を聞き、ハラスの自宅にいた全員が慌ただしく動き出す。ゲシュタポから逃れるためにアメリカ大使館へ行くように促されても拒み続けていたローレンスでさえも、この事故の重大さを察知してハラスの薦めを素直に受け入れるのであった。ここに、ドイツをアメリカに救済して欲しいというツックマイヤーの願望が見える。ローレンスをアメリカ大使館に行かせることにより、ナチスの下で間違った方向に進んでいるドイツと、権力に逆らえないドイツ国民をアメリカによってナチスから解放して欲しい、つまりアメリカに亡命しているツックマイヤー自身の現状をローレンスに置き換えたのであろう。さらにツックマイヤーはドイツとアメリカが和解することを願い、両国の架橋となる象徴

<sup>25</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 201. u. S. 319–320.

ツックマイヤーは、小学校でシラー『鐘の詩』やゲーテ『詩と真実』のヨーゼフ二世の戴冠式の章を読んだこと、ヘッセンの同郷人であるビューヒナーを守護聖人と考えている大学時代の仲間と一緒に雑誌『法廷 (Das Tribunal)』を発行していたことを記している。

<sup>26</sup> Johann Wolfgang von Goethe, *Johann Wolfgang von Goethe Werke Hamburger Ausgabe*, Bd. 12, (Textkritisch durchgesehen und kommentiert) Hans Joachim Schimpf, München: Deutscher Taschenbuch, 1982, S. 534.

の人物としてローレンスを登場させた。それは、「バディ・ローレンス」と言う名に注目してみると、その思いが明白になる。「ローレンス」は、オスマン帝国からアラブ人独立を支援したイギリス陸軍将校トーマス・エドワード・ローレンス (Thomas Edward Lawrence, 1888-1935) にちなんで付けたと考えられる。T. E. ローレンスが亡くなったのは1935年5月であるが、この頃ドイツでの活動が制限されていたツックマイヤーは、イギリスで映画脚本を書く仕事を多く引き受けていた。イギリスに頻繁に行っていたツックマイヤーは、おそらく T. E. ローレンスの葬儀の報道を見聞きしていたであろうし、彼の活躍やアラブ文化に対する情熱に関心を寄せたはずである。それは、将校ローレンスがアラブの文化に触れてアラブを愛した姿と、記者ローレンスが政治的な立場を踏まえて堅実に考える人間であると同時に、冒険家で向こう見ずな行動をし、ドイツ語とドイツを愛した姿が重なることから推測できるだろう。また「バディ (buddy)」は英語で「兄弟、相棒」という意味である。ドイツとアメリカが和解し、親しくなり、互いが助け合う国になることを望んだのだろう。これに加え、記者ローレンスがツックマイヤー自身の一部として近親の思いを込めたと考え、バディ・ローレンスと名付けた理由も見えてくるだろう。

1945年5月、ドイツは降伏するのであるが、ツックマイヤーはすぐに帰国に向けて行動を起こすことはなかった。アメリカで農場経営を続けたいと考えていたツックマイヤーは、その費用を稼ぐために、ドイツに駐留しているアメリカ軍から送られてくる報告を基に駐留地域の問題点を指摘する仕事を1946年7月から始めた。そして、この仕事を通じて、同年11月から翌年3月までドイツに赴き、現地の状況をまとめた『ドイツ報告書 (*Deutschlandbericht*)』の作成をアメリカ国務省から依頼されるのであった。短い期間であるが帰国できる喜びを感じるのと同時に、自分がドイツと世界を繋ぐ架け橋になれるかもしれない、ということをつックマイヤーは感じる<sup>27</sup>。ドイツとアメリカの架け橋になることを託して誕生させたローレンスの役目を、実際にツックマイヤー自身が果たす機会を得たのである。

### 第3章 アメリカ人として帰国したツックマイヤー

終りが見えない亡命生活、そして強制帰国を言い渡されるかもしれない不安の中で過ごしていたからであろうか、1943年にツックマイヤーはアメリカ国籍取得を申請し、1946年1月30日に取得する<sup>28</sup>。そして11月に任務を遂行するためにドイツに向かったツックマイヤーは、「ドイツで活動

<sup>27</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 632-635.

この任務に禁止事項は無く、政治的な監視や探査とも関係が無かったので、何ら負担ではなかった。身分は一般市民であったため、軍服を着る必要はなかったにもかかわらず、移動、食事、宿舎に関してはアメリカ軍兵士と同じ待遇、給与は大佐と同等であった。この報告書についての研究は、以下の図書として出版されている。Carl Zuckmayer, *Deutschlandbericht für das Kriegsministerium der Vereinigten Staaten von Amerika*, (Hrsg.) Gunther Nickel/Johanna Schrön/Hans Wagener, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch, 2004.

<sup>28</sup> Gunther Nickel/Ulrike Weiß, *Carl Zuckmayer 1896-1977 „Ich wollte nur Theater machen“* (Marbacher Katalog 49), Stuttgart: Deutsche Schillergesellschaft Marbach am Neckar, 1996, S. 312.

しドイツを愛するアメリカ人」というローレンスと同じ状況となり、願っていた「ドイツとアメリカを結ぶ架け橋の役目」を果たすのであった。

しかし、1946年にベルリンを訪問したツックマイヤーは、かつて住んでいた街が破壊され、変わり果てた街の姿を目の当たりにしたことによって、強い故郷喪失感に襲われる<sup>29</sup>。1939年に作った詩の中で想像したドイツの状況が、現実となって目の前に広がっていたのである。同行した演出家のボレスラウ・バルロク (Boleslaw Barlog, 1906–1999) は、「戦争によって破壊されたベルリンの風景を見たツックマイヤーは、一言も発することができずにいた。その真面目で悲しげな目に国境などなく、絶えずこみ上げてくる動揺と想像の中で全てを迫体験している詩人の姿を感じた<sup>30</sup>」と回想している。ドイツで両親や旧友と再会し、絶えずドイツ語を耳にすることで、ツックマイヤーはアメリカ国籍を持ちアメリカ政府に奉仕しているとしても、自分はアメリカ人ではなく生まれ育ったドイツの言語と気質を持って、その民族として生きているのだ、ということ強く感じたのであった<sup>31</sup>。だが一方で、アメリカの文化に触れ、アメリカを愛し、アメリカ国籍を得たことで自分がアメリカ国民であるという自覚と、アメリカで見つけた居場所が本当の故郷であるかのような感覚が既にツックマイヤーに芽生え、異郷が故郷にもなるのだ、とツックマイヤーは確信したのかもしれない。

民主主義の実現に向けて新たなドイツ政府を築き上げるために、アメリカが行っている非ナチ化の再教育計画が重要であると思っていたツックマイヤーは、国務省への報告が終わった後もアメリカ人が指導する民主化に理解を示し、ドイツ国民が抱いているアメリカに対する先入観を取り払うための活動を続けた<sup>32</sup>。例えば、国際情報と教育計画の一環としてアメリカが大衆に向けて設立したラジオ局の番組『アメリカの声 (Die Stimme Amerikas)』でドイツ語の原稿を読んだ<sup>33</sup>。そして、ドイツに戻ったツックマイヤーは、自分が予想していた以上にドイツ国民の思想がナチスに統制されていた点と、ドイツを民主化するために相当な尽力をアメリカに求めなくてはならない点に気が付くのであった<sup>34</sup>。

ツックマイヤーは散文『別離と帰還の悲歌』を、アンゲルス・ジレージウス (Angelus Silesius, 1624–1677) の二行詩「己に何も与えることなかれ (*Miß dir doch ja nichts zu*)」<sup>35</sup>の一部を書き替

---

<sup>29</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 651.

<sup>30</sup> Zit. Boleslaw Barlog, *Theater lebenslanglich*, München: Knaur, 1981, S. 291.

<sup>31</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 630. u. S. 651.

<sup>32</sup> Katrin Weingran, „Des Teufels General“ in der Diskussion, Marburg: Tectum, 2004, S. 18.

<sup>33</sup> Nickel/Weiß, *Carl Zuckmayer 1896–1977*, a. a. O., S. 316.

毎日26か国語で70番組以上放送していたラジオ局で、プロパガンダとして重要な道具であった。

<sup>34</sup> Joachim Szodrzyński, *Der Nachrichtendienst und sein Dichter-Carl Zuckmayers Geheimreport Überlegungen zu einem deutschen Intellektuellen*, in: (Hrsg.) Markus Joch/Norbert Christian Wolf, *Text und Feld Bourdieu in der literaturewissenschaftlichen Praxis*, Tübingen: Max Niemeyer, 2005, S. 348.

<sup>35</sup> Angelus Silesius, *Cherubinischer Wandersmann*, Drittes Buch, Nr. 232, (Hrsg.) Hans Ludwig Held, München: Carl Hanser, 1949, S. 103.

えた詩で締めくくっている。それは、大学当時、仲間たちとモットーにしていた詩である。

Freund, so Du etwas bist, so bleib doch ja nicht stehen!

Du sollst von einem Licht fort in das andere gehen.

友よ、お前が何者かであるならば、絶対に立ち止まっていたはならない。

お前は一つの光の中から、もう一つの光の中へ前進すべきである。

そして、シレージウスの詩は次に示すものである。

Freund, so du etwas bist, so bleib doch ja nicht stehen,

Man mus auß einem Licht fort in das andre gehn.

友よ、お前が何者かであるならば、絶対に立ち止まっていたはならない。

一つの光の中から、もう一つの光の中へ前進しなければならない。

シレージウスは、たとえ偉人になったとしてもさらに経験を積み、学び続けなくてはならない、自分ももう完璧であると思ってその環境に留まり、成長を止めてしまうことは危険である、ということを知っていたのであろう。そして、ツックマイヤーも同じ思いを抱いていたに違いない。しかし二行目の *Man muß* を *Du sollst* に書き替えたことから、シレージウスとは違う新たな想いをツックマイヤーが詩に込めたと感じることができる。ツックマイヤーは、自分自身に *Du* で呼びかけ、自身を鼓舞して辛い境地を乗り越えようとしていると感じられよう。つまり、「自分は、一つの光の中から、もう一つの光の中へ前進したい。(Ich will aus einem Licht fort in das andre gehn.)」という意志を込めたのである。また、*Du* がドイツとドイツ人を示していると考えると、「破壊されても諦めずに前を向いて進め」というように、祖国に向けた愛情であると読み取れるだろう。さらに、*von einem Licht* は、『別離と帰還の悲歌』(1939)の第三連五、六行目 (*Leid wird zu Flammen, die sich selbst verzehren, / Und nur ein kühler Flug von Asche bleibt*) に繋がっていると考えられるのではないか。シレージウスの時代の「光」は蠟燭や松明の光であったことを考えると、「同じ場所に留まっていると成長しない、先に進んで成長し続けろ。一つの場所に留まっていると燃えて灰になる」という見方ができそうだ。これから先、自分の行く手に困難が待ち受けていても、それに立ち向かう勇気を持たなくてはならない。それは、あらたな故郷となったアメリカとの辛い別れになるのであるが、自分が生まれ育ったドイツで暮らすことを望み、それを達成するべく前に進む決心をしたツックマイヤーの姿を見ることができるのである。

## 終章

ドイツ降伏からおよそ二十年間、ツックマイヤーはドイツとアメリカを往復する生活を続け、1966年にアメリカ国籍を離籍してスイス国籍を取得する<sup>36</sup>。二十年という月日は、アメリカと離れ難くなっていくには十分である。

ところでなぜ、ツックマイヤーはドイツ国籍を取り戻さなかったのだろうか。帰国するために尽力してきたはずなのに、この行動には違和感を覚える。これにはツックマイヤーが納得できないドイツ政府の方針が関係しているのであった。それは、無理矢理ドイツ国籍を奪われた人であっても、国籍を取り戻すために陳情書を書かねばならなかった、ということである。ドイツ人が再びドイツ国民に戻るために陳情書を書かなければならないということは、ツックマイヤーにとって侮辱されたのも同然である。あまりにもひどい仕打ちに落胆したツックマイヤーは、ドイツ国籍を得ずにスイス国籍を取得したのであった<sup>37</sup>。自分の心に反することはできずハリウッドから去った様に、筋が通っていないことや納得ができないことに妥協しないのは、ツックマイヤーの生まれ持った性分と言えるであろう。また、1958年7月からは日常的にドイツ語を耳にすることができるスイスの山岳地域にあるザース・フェーに家を借りて暮らし始めたことも関係している<sup>38</sup>。ツックマイヤーは気に入った場所に出かけ、そこでの発見や感じたことを作品に反映させた。散歩の途中で天然石や植物を採集することにも熱心になり、集めた物を部屋に飾っていた。ツックマイヤー夫妻は、結婚式や宗教儀式などの村で行われるすべての行事に参加し、住民としてすっかり溶け込むと、ツックマイヤーの65歳の誕生日である1961年12月27日に、夫婦そろって名誉市民の称号を得た。その後、アメリカ国籍を離れてスイス国籍を得るのであった<sup>39</sup>。

スイスに居を構えてからもドイツ文壇の大家として精力的に執筆活動をしたツックマイヤーは、自身の故郷はライン地方であり、精神や言語に故郷が刻み込まれていることを強調しつつも、故郷を特定の国や民族にこだわらなくても良い、と考えていた<sup>40</sup>。第一次世界大戦が終わってから、生まれ故郷のナッケンハイムでも幼年期を過ぎたマインツでもなく常に新たな地で暮らし、第二次世界大戦後は理由があったとはいえ、アメリカとスイスに居を構えた。一ヶ所に根を下ろすことがなかったツックマイヤーは、従来の故郷に対する概念を振り払い、「故郷は自分で選ぶ<sup>41</sup>」という考

<sup>36</sup> Hans Wagener, *Carl Zuckmayer*, München: C. H. Beck, 1983, S. 40.

<sup>37</sup> *Westermanns Monatshefte* (Dezember 1976, S49), in: Nickel/Weiβ, *Carl Zuckmayer 1896-1977*, a. a. O., S. 446.

<sup>38</sup> ツックマイヤー夫妻は1938年7月にザース・フェーを旅行し、自然美に魅了された。二人はここに住みたいと思ったが、ヘンドルフの暮らしに大変満足していたので、移住はしなかった。1957年に再び訪れた時、家を購入して暮らし始めた。Imseing, Werner, *Carl Zuckmayer in Saars-Fee Ein Album*, Furankfurt am Main: S. Fischer, 1976, S. 7-23.

<sup>39</sup> Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 40.

<sup>40</sup> Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 152-154.

<sup>41</sup> Ebd., S. 11.

えにたどり着く。ツックマイヤーにとってはアメリカもスイスも故郷であったが、決して祖国ドイツを忘れることはなかった。新しいドイツを築くためにアメリカ政府に協力し、ドイツとアメリカの架け橋になりたいと願った。そして戦後は、再びドイツ文壇の大家として精力的に執筆活動を行う。ツックマイヤーにとって愛する「祖国」は、最後まで「ドイツ」であったのだ。

#### 【付記】

本稿は、「明治大学大学院2018年度海外研究プログラム」の助成金により訪問した Deutsche Literaturarchiv で入手した資料に基づく成果である。